

9

2016 vol.44  
no.9

通巻454号 第44巻 第9号  
平成28年9月1日発行 毎月1日発行  
ISSN0389-1895

# 歯科技工

The International Journal of Dental Technology

**tw**  
media  
THE DENTAL  
PUBLISHERS



Clinical Study

## 前歯部補綴における支台歯の状態とマージンの設定位置に応じた材料選択

—自然感と強度、接着といった諸条件への配慮による審美性の獲得

●石田 明

Clinical Advice

### インプラント技工のエラーを防ぐ理工学的判断基準

—スクリュー固定式上部構造における変形防止、適合性・生体親和性・接着強度向上のポイント

●中川 隆志

新連載

### 吸着して機能する総義歯製作を極める技工ステップ

—患者満足を得るために必要な基本的知識と技術

第1回 吸着を成功させる個人トレーの製作

●須藤 哲也

新連載

### 歯のある入れ歯の物語

—200年の歴史に基づき、現代に生きる部分床義歯の臨床知見を再考する

Episode 1 緒論：時代の推移に学ぶバーサルデンチャー学の変遷

●堤 嘉詞

医歯薬出版株式会社

# 「2016 International Conference of Dental Technology」に参加して

—桑田正博先生 in 台中！ 講演を拝聴して感じたこと—

Reporter 風間泰輔（台湾・台北市／ARCH dental laboratory）

6月4日（土）、5日（日）の両日、台中金典酒店（台中市）にて標記大会が開催された。主催は中華民國牙體技術学会（以下、同学会、理事長：鐘啟仁氏）で、台湾の歯科技工士を中心約1,000名が参加した。

筆者は桑田正博氏（愛歯技工専門学校名誉校長）、川島 哲氏（埼玉県川越市／ユニデント）をはじめ、日本補綴構造設計士協会（以下、PSD）会員である中野進也氏、赤坂博之氏、峰岸真沙彦氏、三好秀和氏と来台初日より同行させていただいた。梅雨入りということもあり、初日は豪雨による空港の停電及び洪水で預けた荷物の一部が受け取れないというアクシデントにも見舞われたが、林 慧觀女史（同学会監事）の活躍により翌々日にすべての荷物を無事に受領できた。

学会前日には筆者の勤務するラボにて桑田氏、川島氏らと日本と台湾の歯科事情を討論するという貴重な機会を得た。台湾では5年前から歯科技工士の免許制度が始まり、外国人第1号の合格者は日本人の鹿島 茂氏（台北市／KD デンタルラボ）で、筆者も氏に続き合格している。北京語による試験は一筋縄ではいかなかったが、

再受験をしたくない一心で挑んだ結果が幸いした。

桑田氏の台湾講演のルーツとしては、2015年のことであるが、PSD20周年記念学術大会が開催され、その折に川島氏の紹介で桑田氏と林女史が初対面となり、林女史が桑田氏の真摯な講演内容に感動したことがきっかけで今回の台湾講演に結びついた経緯がある。さらにさかのぼって2011年に同学会の主催で初めて日本人講師が招聘され、川島氏による台湾講演がなされており、これを機に台湾の歯科技工学会、研修会等で「日本人講師旋風」が巻き起こるようになったと筆者は感じている。

## 桑田氏のこれまでの功績

大会に話題を戻すと、開幕式では原住民族の子供達による管弦楽のオープニングショーも催され、台湾スタイルのおもてなしを十分に味わうことができた。ひとたび大会があると何百人の集客力を発揮する同学会の底力も素晴らしいが、これほど受講生らが熱心になるのには台湾の歯科技工士法に continuing education（継続的教育）の制度があることも理由の一つである。

う。すなわち、資格保持者は期間内に一定の単位取得の義務が課せられるのである。不履行の場合、免許の更新ができない。

桑田氏の講演は初日の午後に始まり、会場内は緊張感を持ちつつ、受講者全員が初めて聴く氏の講演に集中力を高めた。1960年代のアメリカにおけるメタルセラミックスの開発にまつわるエピソードでは、当時はもちろんボーセレンパウダーもファーネスも存在しない時代であり、良質の歯冠を開発するために世界中を回つて研究の長石を探し、料理用の圧力釜を改造した自作のファーネスで全歯補綴用のケースを完成されたとのことであった。これだけでも既に想像を絶する西野が窺えたが、さらに完成したメタルセラミックスが口腔内に装着された写真は圧巻で、素晴らしいの一言であった。

また、「咬合の父」と呼ばれるスパイラー先生に師事してナソロジーの基礎知識を直接教授され、ワックスコンテクニックで著明なトマス先生とは一緒に世界中を回つて講演をされたそうである。その他、多くの巨匠たちとの巡り合いを紹介された後に引用された名言、「人は生涯のうち逢うべき



①右より、鄭 福吉氏（通訳）、桑田氏、筆者



②ウエルカムパーティー、英語での祝辞



③熱心に聴講する受講者達

桑田氏の講演は日本では場内は緊張感を帯びたが、初めて聴く歯科技工士たる筆者には、1960年代のアーネスで全金属冠が完成されたことなど、既に想像を絶する。さらに完成したが、口腔内に着用されると、『吸合の火』と呼ばれる。先生に説いていたところ、「人は生きながら死んでいく」を直接教わった。この瞬間で、世界を目の前にして、その他の多くの人々との出会いを経験した。『人は生きながら死んでいく』



④右より莊 政洲氏、趙 仁志氏（台北市歯科技工士会理事長）、川島氏、桑田氏、許 明倫氏（陽明大学歯科病院院長）、張 志麟氏（新光病院歯科主任）



⑤右より川島氏、桑田氏、林 慧觀女士、彭 巧芸女士  
⑥右より川島氏、末瀬一彦氏、鐘 敏仁氏、桑田氏

人には必ず逢う。しかも、一瞬早かりもせず、遅かりもせず」（哲学者の故森 信三氏より）が印象深かった。

患者との関わりでは、若い頃から歯にコンプレックスがあり、加えて歯科医師嫌いの患者を例に挙げ、補綴物が装着された後、化粧室に行ったきり戻ってこないので見に行ったところ、「なぜ青春期に治療をしなかったのだろう」と鏡を見ながら嗚咽していた女性のエピソードが語られた。その後患者から、「私、先生の（補綴物の）おかげで子供を授かりました！」との報

告を受けたと冗談も交じえつつ感動秘話を披露された氏の講演に、筆者も含め会場全体が感銘を受けた。

歯科技工士という職種が世間に認められていなかった時代から常に努力と研究を怠らず、歯科界の発展のため、ひいては人類の健康促進のために世界中で講演をされてきた桑田氏の功績により、現在世界各国で日本人歯科技工士が活躍できる環境が整えられていることは言うまでもない。

現状、補綴物の価格競争が進む一方で、患者は高い対価を支払ったとしても

適正な補綴物を入れられるとは限らない“矛盾の時代”であるが、桑田氏の講演を拝聴して、我々歯科技工士は歯科医療人として患者に真に必要なものを常に追求していかなければならないと再認識できた。

2017年5月には台湾で第6回国際歯科技工学大会（大会長：莊 政洲氏（同学会首席名譽顧問））が開催される。台湾の歯科界にとっても大変名誉なことであり、そして日本人歯科技工士の世界での活躍がより一層期待されることと思う。